

社会復帰に向けての関わり ～つながりの再構築～

黒木記念病院 森野早央里

<ソーシャルサポート・ネットワーク>

- 「日常生活上のニーズに対して支援を提供する人々のネットワーク」
 - 家族、親族、友人、隣人、職場の同僚、ボランティアなどの
インフォーマルなサポート提供者
 - 公的機関や民間組織の専門職などのフォーマルなサポート提供者
- 個人の生活 = 人と環境の相互作用の結果として構成される
 - 「人と環境」のよりよい適合状態の形成が目標
 - つながりの再構築を支援

➤ ソーシャルサポートの機能別6分類

機能別分類名	サポート機能の説明
自己評価サポート	自分の能力・社会的価値に疑いをもったときに有効に働く。自分がマイナスに考えていた自己像の側面を打ち明けることで自分の評価を再度高めることができる。
地位のサポート	自分が何らかの役割を果たしていることで得られるサポート。
情報のサポート	問題の本質、問題に関係している資源に関する知識、代替的な行動に至る筋道に関する情報を共有すること。
道具的サポート	実際的な課題に対する援助の提供。
社会的コンパニオン	共にいる、出かけるなどの社会的活動のサポート。
モチベーションのサポート	根気よく何かを継続したり、解決に向かって進んでいけるようにモチベーションを高めるサポート。

<症例紹介>

◆ A氏 80歳代後半 女性

◆ 入院に至った経緯

ADL自立。アパートにて独居生活をしていた。介護保険未申請。

X年〇月△日、大家が本人の異変に気付き救急要請。

脱水症の診断あり、B急性期病院へ同日入院。

廃用リハビリテーション目的にて当院転院となる。

◆入院時の状況

- ・無保険、戸籍不明、居住地に住民票登録なし
- ・所持金5円
→入院日付けで生活保護を申請
- ・衣服などの持参なし
自宅にも荷物が無い（地域包括支援センターより）

<本人と面談>

「お金もないし、これからどうしよう」

「ここにいつまでお世話になっていいのかな」

→病室のカーテンは閉め切っており表情は硬い。
言葉数も少なく、感情の表出も乏しい印象。

◆ アセスメント

- ・ 31年間、女中として働いた
- ・ 少しの給料で生活していた
- ・ 半年ほど前に仕事がなくなり、現在のアパートを紹介され住んでいた
- ・ お金がなくなり砂糖水を飲んでいて
- ・ 家賃も払っていない

MSW

「頑張ってこられましたね、これからのことは一緒に考えていきましょう」

本人

「入院できてよかった・・・」

<カンファレンス（入院1ヶ月目）>

- 屋内は独歩自立、屋外は補助具を使用して自立
- 排泄などのADLは自立、入浴は介助が必要

→サポートがあれば自宅でも生活できそう

本人は退院後の生活をどのように考えているのだろうか

<関係機関・本人と面談>

- 申請した生活保護が受理された
- 生活環境を整えるために介護保険の申請が必要
→第2号被保険者（管轄は生活保護課）で申請可能

本人

「自宅で生活する自信がない」

「これから、どうしていったらいいかわからない」

MSW

「施設を一緒に探していきましょう」

<施設入居に向けて>

必要物品の
準備

身元引受人
不在

今後要支援がでる
可能性あり

金銭管理の方法
貴重品の管理

生活保護

アパートの引き払い
家賃の支払い

戸籍不明

住民票の
登録なし



<本人と面談（入院3ヶ月目）>

- 一緒に課題を整理
→ **自己評価サポート、情報のサポート、道具的サポート、モチベーションのサポート**を実施
- 本籍地や両親の名前、きょうだいの名前、結婚していた夫のこと、子どものこと、以前住んでいた住所等を話してくれた

本人「あのとき（離婚したとき）は、とりあえず働かないと気が紛れなくて必死だった。住民票がないといろいろ困るよね。」

- 生活保護担当者へ戸籍調査を依頼

→結婚していたときの住所地に戸籍を発見

→死別した弟が、離婚した際に旧姓に変更し、
転居届を出してきてくれたことが発覚

→戸籍がわかったことで住民票を登録することができた

本人「よかった、安心した」と安堵の表情

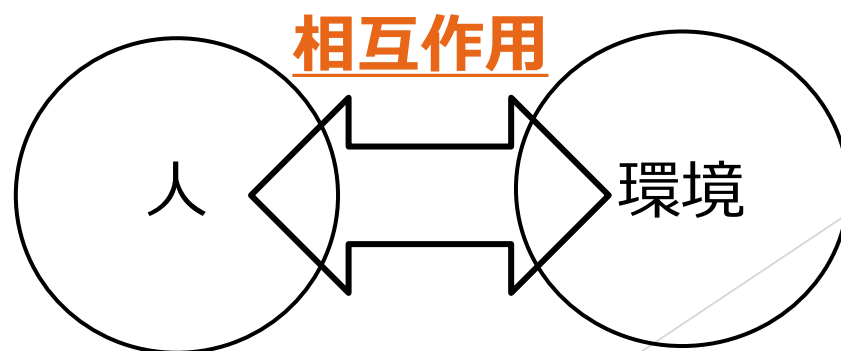
- 本人と自宅へ外出し荷物の片づけを実施
銀行口座の開設 **(社会的コンパニオン)**
- 家賃の分割支払いを大家と相談 **(情報のサポート)**
- 退院後の金銭管理については安心サポートへ依頼
(情報のサポート)
- 施設の必要物品について、院内スタッフへ呼びかけ・
物品購入 **(道具的サポート)**

<結果>

- 戸籍がわかり、住民票を登録することができた
- 生活保護を申請したことで家賃・入院費・入所費の支払いが可能になった
- 安心サポートへつなぐことで金銭管理の不安がなくなった
- 本人が希望した施設へ退院することができた
- 入所することで安心・安全な生活が送れるようになった

<考察>

- 入院時様々な社会問題を抱えており、本人はパワーレスな状態であった
- 日々の面談で、自己評価サポートやモチベーションのサポートを行うことで、本人の自己肯定感を高めることができた
- ソーシャルサポート・ネットワークを構築することで、つながりの再構築ができた



<終わりに>

- 一人ひとり様々な社会的背景をもっており「入院」する
- 「入院」というのはマイナスなことばかりではなく、今後の人生を考えるいい機会になり得ることもある
- 今回の症例は、MSWのみの支援では解決できなかった部分も多く、関係機関との連携の重要性を強く感じた
- 今後も”つながりの再構築”を支援できるようなMSWでありたい